

か わ ら ば ん す ろ ぐ ろ く

定

一、さいころをふって出た
数コマをすすめるべし

一、赤丸の数字のますでは
一回休むべし

一、すごろくが上がった後
地震が起きたときのこと
を家族で話しあ
い事前の備えをするべし

嘉永七年寅十一月四日五日本調べ
諸国大地震津波末代噺

諸国 無事に 通り	袋井・掛川・ 金谷・藤枝・ 府中・江尻・ 興津	此七宿 大地震 大火	東海道 小夜の中山	此所鐘鐘 ▲建立	宮・桑名 大荒れ大荒れ	京・木津・ 奈良・大津 作料	志州(志摩) 鳥羽辺 混雑 混雑	尾州(尾張) 名古屋 諸 入用
日向飢饉 不作	東海鳴海宿 家六戸潰れ	芸州(安芸)・ 備前・備 中・備後	西国筋、芸州 広島、三備州、 尾道とも	伊勢(内宮・外 宮)両宮無事 春日灯籠壊る 賽銭	美濃竹が鼻 地裂け泥吹出 す	美濃大雪 地震	越前・敦賀、 地震其他北国 世直り世直り、 目出度目出度	蒲原・吉原 丸焼
要石 世直り世直 り ▲賽銭	米安直 (安値) 大安売	上町	播州近辺 格別の事もなし	浅草上野 僧正寺無事 ▲賽銭	諸方井戸 やかた 釣鐘堂 何が銭儲け の種になる やら	諸社御千 度 諸国 全安	日本一高山 無事(富士) 目出たく寿の 雲	尼崎・西宮 十一月四日 大地震荒れ 半潰れ
大焼け ▲とまり	三田 大地震 大荒れ	江戸 芝居焼け	諸方やしき 江戸損じ	諸方混雑 五日夕方 ▲風呂 銭	京町堀	大阪 揺り出し	阿波・讃 岐・土佐	大焼け とまり
品川・川 崎・神奈川 大津波	三芝居 焼け	諸方やしき 江戸損じ	▲普請料	大黒橋津波 亀井橋其外 落橋	清水・天王寺 玉造 ▲賽銭 これは堪らぬ 堪らぬ	清水・天王寺 玉造 ▲賽銭 これは堪らぬ 堪らぬ	清水・天王寺 玉造 ▲賽銭 これは堪らぬ 堪らぬ	大焼け とまり
大焼け とまり	大焼け とまり	大焼け とまり	大焼け とまり	大焼け とまり	大焼け とまり	大焼け とまり	大焼け とまり	大焼け とまり

此末代噺は本調べいたし詳しく諸国地震津波并に大火の次第を写し

[翻刻] 名古屋大学減災連携研究センター古文書勉強会
石川寛・平井敬・伊藤由美・清水美帆・末松憲子・鈴木朝貴・手塚朋子・森脇美沙
[推定出版年] 安政元年(1854年) [サイズ] 50cm×70cm
[所蔵] 公益社団法人全国市有物件災害共済会 防災専門図書館 [請求番号] 390-5
[凡例] 一部のひらがなを漢字に置き換えた。繰り返し記号は文字に置き換えた。

すぐろくで勉強した後は、地震・津波災害への備えについて、ご家庭で話し合しましょう。

0 200km

29 竹鼻
28 美濃
美濃

10 越前敦賀
その他北国

22 摂州(摂津) 三田

19 尼崎・西宮

27 播州(播磨) 近辺

31 芸州(安芸) 備前・備中・備後

34 要石

23 品川・川崎・神奈川

20 日本一高山富士

18 蒲原・吉原

16 袋井・掛川・金谷・藤枝

府中・江尻・興津

15 東海道小夜の中山

17 日坂

32 東海道鳴海

11 尾州(尾張) 名古屋

12 志州(志摩) 鳥羽

30 伊勢

14 宮・桑名

34 要石

13 京・木津・奈良・大津

2 大阪

3 京町堀

7 大黒橋・亀井橋

8 清水・天王寺・玉造

36 上町

21 阿波・讃岐・土佐

江戸

24 三芝居

25 諸方屋敷

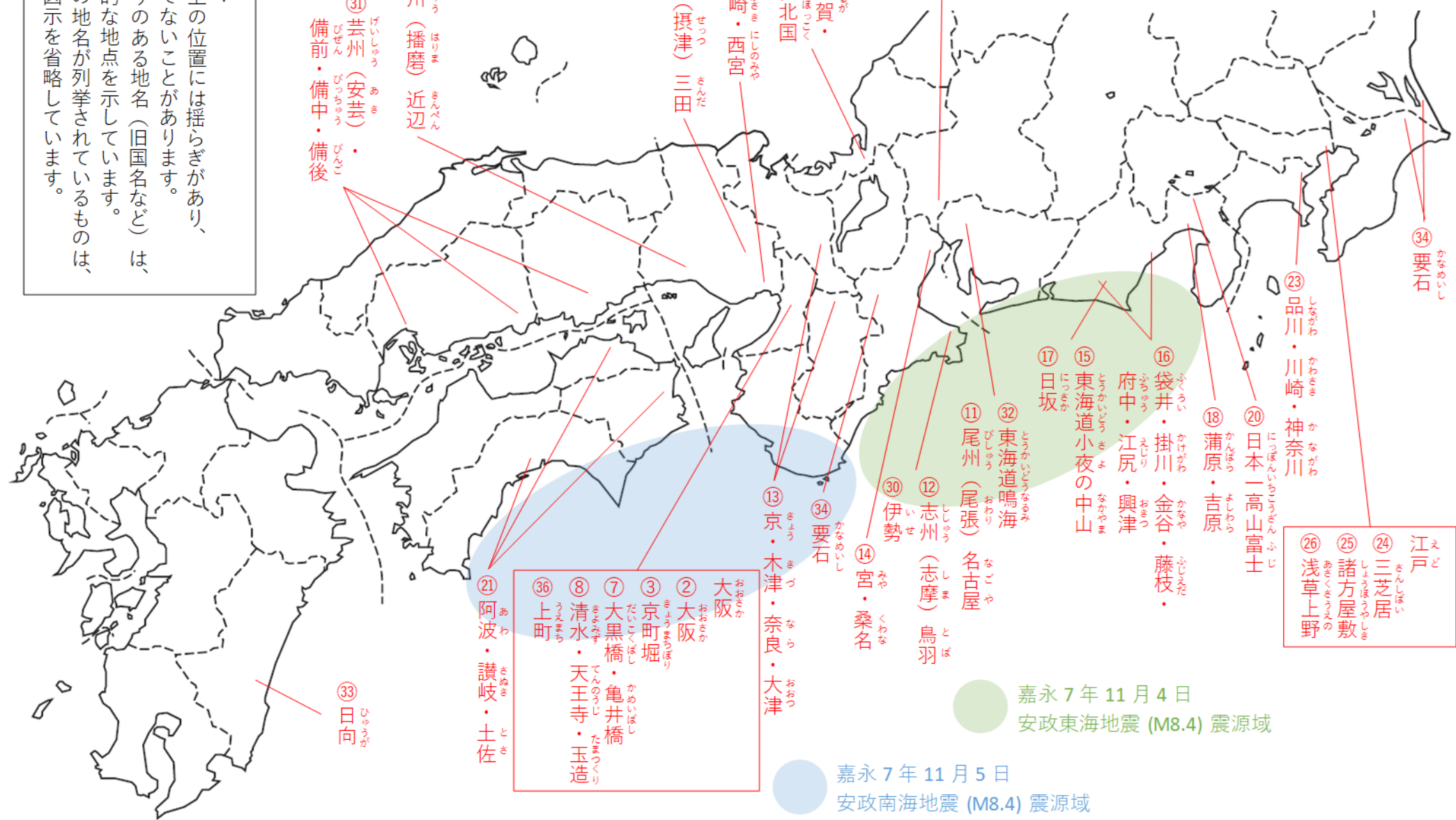
26 浅草上野

嘉永7年11月4日
安政東海地震 (M8.4) 震源域

嘉永7年11月5日
安政南海地震 (M8.4) 震源域

注意

・地図上の位置には揺らぎがあり、正確でないことがあります。
・広がりのある地名(旧国名など)は、代表的な地点を示しています。
・複数の地名が列挙されているものは、一部図示を省略しています。



解説

地震研究と古文書

日本列島は四枚のプレートがぶつかり合う位置にあり、自然豊かな美しい国土を有する一方、古来よりたびたび大地震や津波、火山噴火などの災害に見舞われてきました。このことは、現在まで積み重ねられてきた古地震研究の成果により明らかです。古文書に書かれた内容から過去の地震について知ることは、古地震研究のもっとも基本的な方法のひとつです。

地震研究の立場からいえば、過去の地震を知るための手がかりとなりうるのは、文書記録のみにとどまりません。たとえば、掘削調査により過去の地震や津波の発生履歴を探ることができ、こうした地球科学的調査からは、数千年あるいはさらに以前の災害について客観的に知ることができます。一方、文書記録による情報には主観的な内容が含まれており、この点は注意を要します。しかし、これは逆に、災害によって人間社会が受けた被害や、それに対してどのような対応がなされたかを示すものであり、防災の観点からは非常に重要です。

減災館で展示・解説している古文書・古籍籍・絵図は、過去に日本列島で発生した災害について、先人が書きとめた貴重な記憶を今日に伝えるものです。「体験者」の記録から真摯に教訓を学び取り、今後の災害への備えを進めることが重要です。「諸国大地震大津波未代噺」は、直接的な体験を記録したものではありませんが、各地の被災状況をまとめて刊行された瓦版であり、こうしたものを通して当時の人々が遠方の情報を知りえたことが分かります。

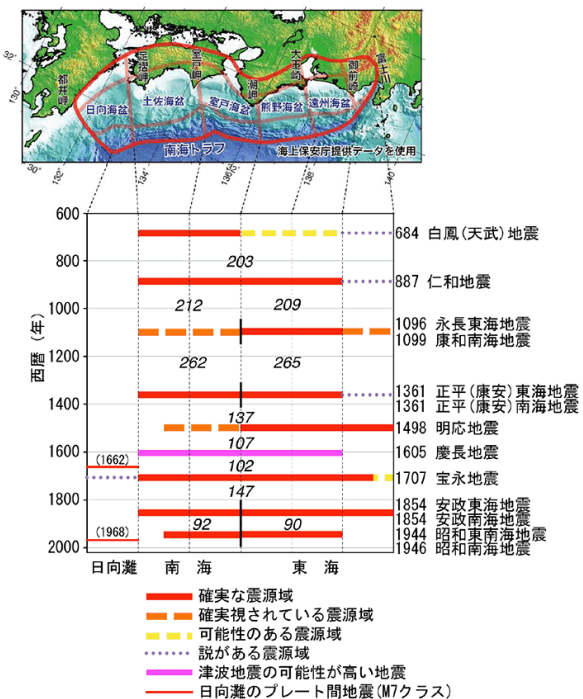
南海トラフ地震

西南日本の南方沖では、北上してきたフィリピン海プレートがユーラシアプレートの下へ沈み込んでいます。沈み込みが始まる位置では海底面が溝状にくぼんでおり、この地形は南海トラフと呼ばれています。南海トラフのプレート同士の境界面では岩盤にひずみが蓄積し、おおむね百年に一度、解放されます。これが南海トラフ地震であり、東海地震・東南海地震・南海地震などと呼ばれるものものの総称です。震源域（ひずみを解放する領域）は、一度の地震で駿河湾から四国沖までのすべてにわたる場合もあれば、東海域で地震が発生してしばらく後に南海域（四国沖）で地震が発生する場合もあり、メカニズムは複雑です。

古地震研究の成果として、図に示した地震が過去に南海トラフで発生してきたことが知られています。近い将来に再び南海トラフ巨大地震が発生すると考えられており、現在国を挙げて対策が進められているところです。

安政東海・南海地震

嘉永七年十一月四日（西暦では1854年12月23日）に熊野灘から駿河湾にかけて、翌五日に紀伊水道から四国沖にかけての海域をそれぞれ震源域とする地震が発生しました。地震の規模を表すマグニチュードは、ともに



八・四と推定されています。この年の十一月二十七日に安政と改元されたので、これらの地震を安政東海地震・安政南海地震と呼びます。

安政東海地震では、箱根西麓から浜名湖付近の沿岸部で激しく揺れ、また地震に伴って発生した津波はサンフランシスコまでも到達しました。安政南海地震では、紀伊半島南部から四国南部にかけて激しい揺れに見舞われました。「稲むらの火」という、和歌山県の広村で浜口儀兵衛の尽力により津波での死者を減らすことができたという話は、この地震のときのものです。また、東日本大震災を受けて日本では十一月五日を「津波防災の日」と制定し、さらに国連総会でもこの日を「世界津波の日」と定めました。

⑦「大黒橋津波、亀井橋・其外落橋」について

安政南海地震・津波では、大阪の道頓堀川にかかる大黒橋や、木津川にかかる亀井橋などに、津波の遡上によって流された船がぶつかり、多くの橋が崩落しました。京セラドーム大阪の東側を流れる木津川にかかる大正橋のたもとに、「大地震両川口津浪記」の石碑があります。安政南海地震・津波の被害をうけて建立された供養碑です。津波で流された大型の船が大黒橋へ横付けになり、そこへ複数の船が次々に乗り上がって山のようになった様子や、「安治川橋、亀井橋、高橋、水分、黒金、日吉、汐見、幸、住吉、金屋橋等ごとく崩れ落ち」といった被害の様子が描写されています。

「(前略、十一月四日の安政東海地震について触れた後)十一月五日申の刻、さらに大きな地震があり(※安政南海地震)、家が崩れ、火事も起き、恐ろしい様子であった。日暮れごろ雷のような響きとともに海辺一帯に大波が押し寄せた。安治川はもちろん、木津川は特に激しく、山のような大波が立ち、東横堀まで泥水が四尺入り込んだ。つないであった船は川にかかった橋に折り重なるようになってぶつかり、乗っていた人たちは溺れたりして亡くなってしまった。あつという間のことだったので、助けることができなかった。今から一四八年前の宝永四年十月四日の大地震(※宝永の南海トラフ地震)の際にも、地震の揺れを怖がって船に避難していたところ、津波がやってきて溺死した人が多かったという。年月が経って、このことを知る人がとても少なくなつたため、今回また、同じ場所で宝永時代と同じような大被害を出してしまった。胸がつぶれる



墨入れの様子

ような思いで、言い表すことができない。後年、また同じことが起きるかもしれない。(中略)津波の水の勢いは時々ある高波とは異なって速いことは、今回被害を経験した人たちはよくわかったが、後世の人のため、また、犠牲になつた人の供養のため、ありのままを記す。どうか心ある人は、この石碑の文字がいつでも読みやすいように、墨を入れてほしい」

現在でも、地域住民たちが墨汁で文字をなぞり、供養碑の文字を読みやすく保つとともに、近年では毎年八月二十三日に供養の法要が営まれています。